# 泉ある家

宮沢賢治

これが今日(きょう)のおしまいだろう、と云(い)いながら斉田(さいた)は青じろい薄明(はくめい)の流(なが)れはじめた県道に立って崖(がけ)に露出(ろしゅつ)した石英斑岩(せきえいはんがん)から一かけの標本(ひょうほん)をとって新聞紙に包んだ。

富沢(とみざわ)は地図のその点に橙(だいだい)を塗(ぬ)って番号(ばんごう)を書きながら読んだ。斉田はそれを包みの上に書きつけて背嚢(はいのう)に入れた。

二人は早く重(おも)い岩石の袋(ふくろ)をおろしたさにあとはだまって県道を北へ下った。

道の左には地図にある通りの細い沖積地(ちゅうせきち)が青金(あおがね)の鉱山(こうざん)を通って来る川に沿(そ)って青くけむった稲(いね)を載(の)せて

北へ続(つづ)いていた。山の上では薄明穹(はくめいきゅう)の頂(いただき)が水色に光った。俄(にわ)かに斉田が立ちどまった。道の左側(ひだりがわ)が細い谷になっていてその下で誰(だれ)かが屈(かが)んで何かしていた。見るとそこはきれいな泉(いずみ)になっていて粘板岩(ねんばんがん)の裂(さ)け目から水があくまで溢(あふ)れていた。

（一寸(ちょっと)おたずねいたしますが、この辺(へん)に宿屋(やどや)があるそうですがどっちでしょうか。）

浴衣(ゆかた)を着(き)た髪(かみ)の白い老人(ろうじん)であった。その着こなしも風采(ふうさい)も恩給(おんきゅう)でもとっている古い役人(やくにん)という風だった。蕗(ふき)を泉(いずみ)に浸(ひた)していたのだ。

（宿屋ここらにありません。）

（青金の鉱山できいて来たのですが、何でも鉱山の人たちなども泊めるそうで。）
老人はだまってしげしげと二人の疲れたなりを見た。二人とも巨きな背嚢をしょって地図を首からかけて鉄槌を持っている。そしてまだまるでの子供だ。
（どっちからお出でになりました。）
（郡から土性調査をたのまれて盛岡から来たのですが。）
（田畑の地味のお調べですか。）
（まあそんなことで。）
老人は眉を寄せてしばらく群青いろに染まった夕

ぞらを見た。それからじつに不思議な表情をして笑った。

（青金で誰か申し上げたのはうちのことですが、何分汚ないし、いろいろ失礼ばかりあるので。）（いいえ、何もいらないので。）

（それではそのみちをおいでください。）

老人はわずかに腰をまげて道と並行にそのまま谷をさがった。五、六歩行くとそこにすぐ小さな柾屋があった。みちから一間ばかり低くなって蘆をこっちがわに塀のように編んで立てていたのでいままで気がつかなかったのだ。老人は蘆の中につくられた四角なく

ぐりを通って家の横に出た。二人はみちから家の前におりた。

（とき、とき、お湯持って来。）老人は叫んだ。家のなかはしんとして誰も返事をしなかった。けれども富沢はその夕暗と沈黙の奥で誰かがじっと息をこらして聴き耳をたてているのを感じた。

（いまお湯をもって来ますから。）老人はじぶんでとりに行く風だった。（いいえ。さっきの泉で洗いますから、下駄をお借りして。）老人は新らしい山桐の下駄とも一つ縄緒の栗の木下駄を気の毒そうに一つもって来た。

（どうもこんな下駄で。）（いいえもう結構で。）

二人はわらじを解いてそれからほこりでいっぱいになった巻脚絆をたたいて巻き俄かに痛む膝をまげるようにして下駄をもって泉に行った。泉はまるで一つの灌漑の水路のように 勢 よく岩の間から噴き出ていた。斉田はつくづくかがんでその暗くなった裂け目を見て云った。（断層泉だな。）（そうか。）

富沢は蕗をつけてある下のところに足を入れてシャツをぬいで汗をふきながら云った。

頭を洗ったり口をそそいだりして二人はさっきのくぐりを通って宿へ帰って来た。その煤けた天照大神

と書いた掛物の床の間の前には小さなランプがついて二枚の木綿の座布団がさびしく敷いてあった。向うはすぐ台所の板の間で炉が切ってあって青い煙があがりその間にはわずかに低い二枚折の屏風が立っていた。

　二人はそこにあったもみくしゃの単衣を汗のついたシャツの上に着て今日の仕事の整理をはじめた。富沢は色鉛筆で地図を彩り直したり、手帳へ書き込んだりした。斉田は岩石の標本番号をあらためて包み直したりレッテルを張ったりした。そしてすっかり夜になった。

　さっきから台所でことことやっていた二十ばかりの

眼の大きな女がきまり悪そうに夕食を運んで来た。　その剝げた薄い膳には干した川魚を煮た椀と幾片かの酸えた塩漬けの胡瓜を載せていた。　二人はかわるがわる黙って茶椀を替えた。

（この家はあのおじいさんと今の女の人と二人切りなようだな。）　膳が下げられて疲れ切ったようにねそべりながら斉田が低く云った。

（うん。　あの女の人は孫娘らしい。　亭主はきっと礦山へでも出ているのだろう。）　ひるの青金の黄銅鉱や方解石に柘榴石のまじった粗鉱の堆を考えながら富沢は云った。　女はまた入って来た。　そして黙って押入

れをあけて二枚のうすべりといの角枕(かくまくら)をならべて置(お)いてまた台所の方へ行った。

二人はすっかり眠(ねむ)る積(つも)りでもなしにそこへ長くなった。そしてそのままうとうとした。

ダーダーダーダーダースコダーダー

強い老人(ろうじん)らしい声が剣舞(けんばい)の囃(はや)しを叫(さけ)ぶのにびっくりして富沢(とみざわ)は目をさました。台所の方で誰(だれ)か三、四人の声ががやがやしているそのなかでいまの声がしたのだ。

ランプがいつか心(しん)をすっかり細められて障子(しょうじ)には月の光が斜(なな)めに青じろく射(さ)している。盆(ぼん)の十六日の次(つぎ)の夜なので剣舞の太鼓(たいこ)でも叩(たた)いたじいさんらなのかそれ

ともさっきのこのうちの主人（しゅじん）なのかどっちともわからなかった。

（踊（おど）りはねるも三十がしまいって、さ。あんまりじさまの浮（う）かれだのも見だぐなぃもんさ。）むっとしたような慓悍（ひょうかん）な三十台の男の声がした。そしてしばらくしんとした。

（雀（すずめ）百まで踊り忘（わす）れずでさ。）さっきの女らしい細い声が取（と）りなした。

（女※（あね）［#小書き平仮名こ、128-12］引ぱりも百までさ。）またその慓悍な声が刺（さ）すように云（い）った。そしてまたしんとした。そして心配（しんぱい）そうな息（いき）をこくりとのむ音が近

くにした。富沢は蚊帳の外にここの主人が寝ながらじっと台所の方へ耳をすましているのを半分夢のように見た。

(さあ帰って寝るかな。もっ切り二っつだな。そいでぁこいづと。)(戻るすか。)さっきの女の声がした。こっちではきせるをたんたん続けて叩いていた。(亦来るべぃさ。)何だか哀れに云って外へ出たらしい音がした。

あとはもう聞えないくらいの低い物言いで隣りの主人からは安心に似たようなしずかな波動がだんだんはっきりなった月あかりのなかを流れて来た。そして

富沢はまたとろとろした。次々うつるひるのたくさんの青い山々の姿や、きらきら光るもやの奥を誰かが高く歌を歌いながら通ったと思ったら富沢はまた弱く呼びさまされた。おもての扉を誰か酔ったものが歌いながら烈しく叩いていて主人が「返事するな、返事するな。」と低く娘に云っていた。さっきの男も帰って娘もどこかに寝ているらしかった。「寝たのか、まだ明るぞ。起きろ。」

外ではまたはげしくどなった。

（ああこんなに眠らなくては明日の仕事がひどい。）

富沢は思いながら床の間の方にいた斉田を見た。

斉田もはっきり目をあいていて低く鉱夫だなと云った。富沢は手をふって黙っていろと云った。こんなときものを云うのは老人にどうしても気の毒でたまらなかった。

外ではいよいよ暴れ出した。とうとう娘が屏風の向うで起きた。そして（酔ったぐれ、大きらいだ。）とどうやらこっちを見ながらわびるように誘うようになまめかしく呟いた。そして足音もなく土間へおりて戸をあけた。外ではすぐしずまった。女はいろいろ細い声で訴えるようにしていた。男は酔っていないような声でみじかく何か訊きかえしたりしていた。それか

ら二人はしばらく押問答をしていたが間もなく一人ともつかず二人ともつかず家のなかにはいって来てわずかに着物のうごく音などした。そしていっぱいに気兼ねや恥で緊張した老人が悲しくこくりと息を呑む音がまたした。

底本：「ポラーノの広場」角川文庫、角川書店
１９９６（平成８）年６月25日初版発行
底本の親本：「新校本　宮澤賢治全集」筑摩書房
１９９５（平成７）年５月
入力：ゆうき
校正：noriko saito
２００９年８月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。